



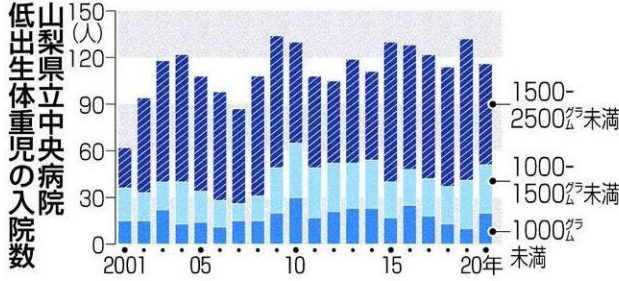
勝又庸行  
新生児内科部長

2000年以降、低出生体重児の増加に伴い、新生児の全体的な対応を担っている。成長段階の臓器が十分に機能せず、合併症のリスクがある新生児の治療体制を前に進

医療最前線  
流れをつくる  
県立中央病院から

(244)

出産前後の母子に専門的な治療を行う総合周産期母子医療センターを備える山梨県立中央病院。早産による低出生体重児の中でも、より体重が少ない1500



山梨県立中央病院  
低出生体重児の入院数

2009年に集約化したと見られる。状況によ

と話す。勝又医師によると、低出生体重児は2500g未満の新生児を指す。体の発達

が十分ではないことが影響して、腸や脳、肺などに合併症を引き起こす可能性があり、新生児集中治療室(NICU)で専門的な治療を受けることがある。

体重が少ないほど合併症のリスクが高くなる傾向があり、県内の1500g未満の新生児は同院が基本的に担当している。県内の小児科医、産科医が連携し、

# 退院後も長期にフォロー 県内の1500g未満新生児に対応

退院後も長期にフォローしている。同院に入院する1500g未満の新生児は年間40〜50人。医師、看護師、保育士らが一丸となり、早く健やかに退院できることを目標に診療を行っている。

退院後もフォローする専用外来を設けていることも同院の特徴の一つに挙げられる。1歳半、3歳、6歳、9歳のタイミングでは発達検査を実施。客観的なデータによって成長を可視化することで、育児や進路に悩む保護者をサポートする。

「赤ちゃんを病院でしっかりと育て自宅に帰すだけではない。家族と一緒に成長していく姿を見守っていくことも大切だと感じている」。勝又医師はそう力を込める。

第2、4木曜日に掲載